

「ありがとうございます。お氣をつけて」

乗客が降りてしまったことを確認するかの
ように、背後で運転手の明るい声がした。

「ではまた」

五月の風が美沙の頬を撫でた。

「ごきげんよう」

お互いに会釈をしながら、柔らかな笑顔を残して
老女は、病院とは別の方角へゆつくり足を運
び始めた。

美沙は少しの間、老女の行く先を目で追って
から、病院の正面玄関へ向かった。

受付と待合室になつてゐるホールを抜け、広い
廊下を通り、東病棟の四階の病室へと向かう

た妹を思うと、美沙の心は痛む。

葉の匂いがするだけの殺風景な四階の部屋
番号を確認してドアをノックし、病室へと入っ
た。

夫は四人部屋の窓際のベッドに横たわつてテ
レビに夢中だった。美沙は声をかけた。

「具合はどうなの？」

「ああ」
いつもの返事。心ここにあらずという態度だ。

「これでいいの」
持ってきた本を夫に差し出した。

「ああ」

美沙に用事を言いつけながら、会話らしい言葉

ためエレベーターに乗った。ここに来ると美沙は
ふと妹を思い出す。

美沙の妹は、二十代半ばで、未婚のままこの
病棟の五階で一生を終えた。健康体そのものと
思えたあの妹に無残にも病魔が襲い掛かかり
あつという間に死んでしまった。

美沙にとつては哀しい忘れられない出来事だつ
た。人との別れに胸が張り裂けるほどの辛さを知
り、人は必ず出合った人と別れるという当たり
前のことを、初めて痛感させられた。別れない
人なんていないのだと、自分に無理やり納得させ
たできごとだった。

あれから二十年過ぎた今でも、彼岸へと旅立つ

のない夫に腹立たしさを感じながら、

「これでいいのね」
少し尖った声で念を押した。夫は右手を突き
出すようにして、受け取つた。

「ああ」
やっぱりそれだけだ。口癖と判つていても苛立
つことがある。

こんなに話すことさえも大儀がる夫が、仕事
だけは定年までやり通したことが不思議だ。趣味
らしいものもない。時にパソコンで碁を囲むか
将棋をさしているくらいだ。それもあまり熱心で
はなさそうだ。

それ以外は一日中、テレビの前でじっとして

いる夫に、

「番などしなくても、テレビは逃げませんよ」

好きなものだけにのめり込むたちが腹立たしくて、毒づいたこともあった。その生活もこれだけ長く続けばすっかりなれてしまっている。なれたというより、夫に大きな期待をしていないのだ。ただ、美沙の日常のペースだけは乱されなくなかった。夫が定年退職をした時、美沙も役所を早期退職した。

「私も辞めようかな」

「ああ」

そんな大事でさえ、それだけだった。

(何かあったのか)

返事に救われた。定年まであと三年を残して仕事を辞めた。

美沙が夫に期待を抱かないように、夫も美沙に関心がないのかもしれない。

予想はしていたが退職した二人の向かい合っでの生活は、弾むようなものではなかった。時間をもてあます退屈な日々が続く。目新しいものなんかすぐには見つからない。滅入る日さえある。自分の気持ちをごまかすため美沙は強いて用があるわけでもないが、何かと理由をつけては出かけた。そんな時、夫のふっともらすため息のような返事に、気がとがめることもあったが、それは時間がありあまるいらだちからくるものだと、最近に

それさえ聞かなかった。聞かれなかったことで、美沙の胸の中で迷い続けていた仕事への確かなこだわりを繕うこともなく、いい形のまま辞めることができた。実は胸の内を明かしたくなかったのだ。

町村合併した新しい組織の中で、美沙は上司とうまくやっていく自信を無くし始めていた時だった。実力以上のことを要求されても、それをやり通すだけの情熱を、変わったばかりの上司では見出せる自信はなかった。

「辞めようかな」

「ああ」

受け入れてくれたわけではないが、夫の短い

なつてやつとわかってきた。夫は食事や風呂の準備さえ怠っていないければ、

「夕食には帰ってきますから」

と、付け加えると、いつものように、美沙のほうに顔を向けることもなく、顎を少ししゃくりながらテレビに返事をする。

家庭生活は無気力、無関心で、美沙に任せきりにしてしまうところはあるが、それでも大きなものめごともなく、世間的には平穩そのものいい夫婦と映っていることだろう。還暦前後の夫婦が、平均寿命まで生きるとすればあと二十年。どのように過ごしていけばいいのだろう。話し合いなどしないまま、成り行きの

生活だった。それが決して不幸とまでは言えないことを美沙自身よくわかっていた。

夫の親と自分の両親を見送り、一男一女の子供たちも巣立った。まだまだ心配事もあるだろうが、子や親としての役目は一区切りついている。美沙は六十歳を前に休めない仕事からやっと解放され、自分の時間が持てた。しかし、ときめくような日常があるわけではない。が、もう少しだけ、頑張ってみたい何かを探していた。友人とお茶の時間だけでは物足りないものを感じはじめてきていた。そんな時の夫の突然の入院だ。夫は美沙が持ってきた本に目を通すこともなく、まだテレビを見ている。

まるですねた子供が機嫌の悪いままもくもくと食べているような、不器用な姿だった。美沙は家で手早く作った自分用の昼食の出すまき玉子を、夫の膳に加えながら、「ご飯はおいしいの。梅干入りのこのおにぎりあなたも一つ食べる」

二つあるおにぎりを見せながら夫に聞いた。「いいや」
「相変わらず無愛想だ。美沙はポットの湯を急須に注ぎ、夫の湯飲みに頃合いのお茶をいれた。」
「今日はバスで来たから、あわてておにぎりにしたのよ」

「えつ。何でバス。車がどうかしたのか」

殺風景な男ばかりの病室にも、初夏の陽光が射し込んでくる。窓際の花が少し弱音を吐いているようだ。美沙はいそいそと花瓶の水を替え、ベッドの周りなどを整頓し始めた。まるで二人の日常がそこにあるような主婦の顔になって。患者の付き添いとしての一通りの仕事を終えた美沙は、夫と同じテレビの画面を見ながらとりとめもない時間を過ごしていた。

ブラインド越しに浴びる光りは美沙の背中に心地よいが、病室での時間は楽しいものではない。昼食が運ばれてきた。幸い、夫の怪我は左肩なので、食事の介助は必要ないが、恰好は、

出し抜けの問いかけに、美沙の方がどぎまぎさせられる。「違うのよ。天気がいいから気分転換にバスにしてみたのよ」

「そうか」
「お昼の時間になるけどどつかで食べるわけにもいかないし、お弁当を持ってきたのよ」
おにぎりをほおばりながら、「百円バス」の話をした。

「なんだかバスに乗って遠足気分だったわ」
「ふーん」
「バスだから、寄り道もできないし、おにぎりを持ってきたの」

「それなら前の喫茶店へでも行けばいいんだ。飯が美味いらしいよ」

突然夫が思い出したようにぼつそり言う。

「病院の前ですか」

「下の、ほら、そこから見えるだろう」

夫は窓の方へ顎をしやくる。誰かほかの患者

から聞いたのだろうか。

美沙はブラインドの真ん中の辺りを指ではじ

き、四階の窓から、見下ろした。

〈愛慕里〉との看板の上で赤色の回転灯が回っ

ていた。

「隣の見舞い客が言っていたが、珈琲だけでな

くモーニングもランチもいいらしい。今度来た時、

昼飯はそこでとればいいよ」

夫にしては珍しくよく喋る。

「そうね、一度行ってみるわ」

美沙は快く返事をした。

日頃は、喫茶店も食堂も一人では入らないたち

だったが、行ってみたい思いが掠める。

なぜか、朝のバスに同乗したあの老女が、

〈愛慕里〉の方に向かっていたような気がした。

「あなたは行かないの」

夫に聞いてみた。

「ああ、この病院にいる間に一度ぐらいは行っ

てみようかな」

「じゃ、私が先に偵察しようつ、と」

ひとり言のつもりだ。

「そうするといいよ」

いつもにない優しい口調がかえってきた。

美沙は、夫の傍で帰りのバスの時間まで過

し、病室を出た。

(以上4月16日放送分)